
ずっと一緒にいたかった。

にたま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ずっと一緒にいたかった。

【Nコード】

N9283T

【作者名】

にたま

【あらすじ】

ずっと、ずっと頭の片隅にあった妄想を書き起こしてみました。ルークがネギま！の世界へトリップしている話です。ネギ、TOAの一部PTに敵しめ、TSありですのでご注意ください。

更新は亀ですが頑張って逝きたいと思えます；

エピソードのプロローグ

「ああ、消えるのか」

青年、いや生きた年数でいえばまだ少年と言える彼はつぶやいた。彼はルーク。

このオールドランドという世界を破滅の危機から救った英雄である。しかし、彼の身体は消滅しようとしていた。

正確に言えば、彼が今横抱きにしている顔の同じ青年に存在を喰われてしまうのだ。

「大爆発」と呼ばれる現象が起きていた。

これは完全に同じ存在同士が起こる現象で、ルークとこの同じ顔の青年アッシュは完全に同じ存在であるためにその現象が起こっているのだ。

ふと彼らの周りが揺らめいた。

陽炎のような揺らめきの中、炎の色をした何かが形を作っていく。

「私が見た未来がわずかでも覆されるとは。…驚嘆に値する」

炎の色をしたそれは表情こそよくわからないが、ひどく感心したような声音で言った。

「お前が、『ローレライ』か」

「いかにも。私を地殻から解放してくれたこと、感謝する。私の半身たちよ」

そう彼は『ローレライ』。2000年前、聖女と謳われた『ユリア・ジュエ』によつて地殻に封じ込められた第七音素意識集合体だった。ローレライは陽炎のように揺らめきながらルークと彼が抱えるアツシユの周りを一周する。
そして、ささやくように言葉を告げる。

「ルークよ。私の片割れよ。お前の望みは何だ？」

「望み？」

「ああ、そつだ。私を自由にしてくれた礼だ」

「じゃあ…アツシユを」

生き返られさせてくれ。と続くはずだったルークの言葉をさえぎったのは、目の前にいるローレライ
ではなく自身の腕の中にいたアツシユの、もう、動かないはずのアツシユから発せられた、普通なら
聞き逃ししまいそうなほどのちいさな呼吸の音だった。

「なん、で」

「まだ死んではいないものを回復するなど私にはたやすいこと」

「死んでいない？」

「しかり。死の瀬戸際ではあったが完全な死を迎えてはいなかった」
戸惑うルークにローレライは再度問いかける。

「ルークよ。私の片割れよ。お前の望みは何だ？」

「俺の望みは……」

「その望み叶えよう」

ローレライの言葉と共に彼らの周りに光があふれ出す。
その光に飲まれた二人はもう、その空間のどこにもいなかった。

異世界でのプロローグ？ 少女と担任（前書き）

亀更新申し訳ない！！またプロローグじゃないか！なんて自分が一番わかってます（泣）

本当は第一話を登校：投稿したかったのですが余りの脱線具合に書き直しを決めました！投稿したのは第一話の冒頭部分でした。

第一話から躓いている時点で自分の文才の無さにくじけそうですがなんとかやって逝きたいと思います。

それからお気に入り登録ありがとうございます！！

ちよつとでも期待にこたえられるようにがんばります！！

異世界でのプロローグ？ 少女と担任

AM 6:00

ふっ、ふっ、ふっ、とフットワークも軽く長いツインテールの髪を揺らして少女は朝の仕事である新聞配達に精を出していた。髪留めについている小さな鈴が不規則にチリン、チリンと鳴る。犬の散歩をしている人や同じ新聞配達の人たちと挨拶を交わして彼女は楽しそうに配達の仕事をしていた。

普通なら中学生の彼女がアルバイトである新聞配達など出来ようもないが、特別に許可をもらっているので特に問題は無い。

そこへある青年が彼女と平行して走るように近づいてきた。

「おはよう、神楽坂。今日も早いな」

「あ、おはようございます。先生」

青年は少女、神楽坂 明日菜のクラスの担任だ。走る足を止めずにペコ、とお辞儀をする。

そうすると担任は満足したのか「じゃあまた学校でな」と言いおいて明日菜を追い抜いて行った。

「マクダウエル先生もいつも早いなあ」

束ねた赤い髪を尻尾のようになびかせて行ってしまった担任を見ながら呟いて、明日菜はまた新聞配達に精をだすのだった。

異世界でのプロローグ？ 少女と担任（後書き）

短い…；

誤字脱字の指摘大歓迎です！ビシバシ言ってやってください。

第一話（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます。
お待たせしました^^第一話掲載です！

第一話

ここは初等科から大学までの学術機関を中心としてできた都市、「麻帆良学園都市」である。居住するほとんどの人間が、学園に在籍する生徒か、教師もしくは学園の関係者となっている。また、この中心地でもある麻帆良学園に在籍する生徒は多国籍の人間も多く、非常にグローバル的な学園として内外からの人気が高く、初等科からのエスカレーター式の者もいれば中学校または高等学校からの外部入学の者もいる。そのため生徒の人数は年々増えていき、朝の登校時間ともなればサラリーマンなどいないにもかかわらず電車や道路などは他府県に劣らずの大混雑ぶりをみせている。始業十分前ともなると大勢の生徒たちが学校へ駆けていく。その壮観ともいえる姿はもやは麻帆良の名物となっていた。

そんな大混雑のなかに赤茶色の髪の少年は混じっていた。

しかしこのエリア、都市の最奥にある女子中学校のエリアにはすこし不釣り合いであった。この女ばかりであるはずのエリアに男である少年がいること。また、初等科も卒業していないような幼い容貌であるのにもその不釣り合いに一役買っていた。

初等科エリアは、このエリアから一つ前の駅にあるのだから乗り過ぎしてしまったのだろうか。しかしそれにしては初等科の制服をきているワケではないし、身の丈もありそうな荷物をしょっている。その大きな荷物をしょった少年はおのぼりさんよろしく周りを見渡しているが周りの女生徒からは好奇の視線を向けられていた。

「すごい人！これが日本の学校かー」

感心した声を上げたあと自身を横を走り抜けていった女性とが「ちこくする！」とあわてた声を出していたのに気がついて、持っていた懐中時計を確認すると始業開始まで7分をきっていた。

「わ いけない僕も遅刻する時間だ。初日から遅れたらまずぶっ!？」

校舎まで走っていこうとしたとたん目の前の人影にぶつかった。

「すみません！」とあわてて目の前にいた人物からすこし距離を取りまた走り出そうとするが、その人物に声を掛けられたことでそれは叶わなかった。

「今日からここに配属される、ネギ・スプリングフィールドで間違いないぬえーか？」

「え？あ、はいそうですけど」

走り出そうした格好のまま少年、ネギは返事をした。

「アンタを迎えに行くように学園長に言われてる。とりあえずは校舎まで走るぞ」

いきなりそういってその人はくるりと背を向けて校舎へ向かって走り出した。

そのことにより、ようやくと彼は走り出すことができたのである。

「え、ちょっとまってくださいー!」

目の前を走る彼の尻尾のように一まとめにした赤い髪をネギは不思議なものを見るような目で見ていた。

(ん)、毛先がちょっと金色っぽい。染めてるのかなあ？でもそんな染めてるようなかんじではないし…。あ、そういえばこの人の名前きいてないや)

名前の事を思い至ったネギは後ろからその不思議な髪色をした人に問いかけた。

「あの、お名前はなんていうんですか！」

まわりの喧騒に埋没してしまわないように張り上げた声にその人はちらとネギのほうを見たあと、走る速度はそのままに答えた。

「ルーク・F・マクダウエルだ」

第一話（後書き）

ネギが主人公っぽくなった。

次は明日菜にスポットがあたると思われます。

ルークにネギをしかって欲しいシーンがあるんだ。

誤字脱字の指摘大歓迎です！

第二話（前書き）

お待たせいたしました！

パソコンがぶっ壊れたので8月中に更新する予定が9月の末になり
ましたorz

小説のデータも吹っ飛んだので書いてた内容と大分違いますが、楽しんでいただければと思います。

第二話

『学園生徒のみなさん。こちらは生活指導委員会です。今週は遅刻者ゼロ週間。始業ベルまで10分を切りました。急ぎましょう』

『そういう学園のアナウンスを背景に、神楽坂 明日菜は友人でルムメイトでもある近衛木 乃香と共に校舎へと走っていた。木乃香はローラーブレードを履いているが、周りの人間はスケボーや学園都市内で走っている路面電車に乗っているものもいる。皆、遅刻してはまずいと一心不乱に走っているのだが、明日菜と木乃香の二人はそんな彼らを尻目に雑談を交わしながらこの麻帆良の名物となっている大混雑の中を縫うように走っていた。』

「今日だっけ？新任教師が来るって言ったの」

「そうえ、じいちゃんの友人やいう話や。どんな人なんやろか」

丁寧な京ことばを話す木乃香はちょっと期待したようにその新任教師に思いを馳せる。

「学園長の友人ならそいつもじいに決まってるじゃん」

そう言い切った明日菜に木乃香は自身がいつも持ち歩いているメモ帳を取り出すとぱらぱらと目的のページへとめくり始めた。

「そうけ？今日は運命の出会いありって占いに書いてあるえ」

「え、マジ!？」

「運命の出会いあり」の言葉に食いついた明日菜に木乃香はたどりのついた目的のページを明日菜に見せると、ほらココと指をさした。

「しかも、好きな人の名前を10回言つて「ワン」と鳴くと効果ありやて」

「うそっ!？」

木乃香にそう言われた明日菜はその場で好きな人の名前を叫び始めた。

「高畑先生、高畑先生、高畑先生、高畑先生、高畑先生（以下略）！」

最後にワンツツと言うとさすがに一心不乱に校舎を目指して爆走していた生徒たちもビクツツと方を揺らす。
恋する乙女は盲目らしい。

「あははは、アスナ高畑先生のためなら何でもするわ」

本当にやるとは…と頭を掻いた友人の言葉にからかわれた事を知り、「殺すわよ」と若干本気交じりの言葉を投げかけた。

「えーと次は逆立ちして開脚の上全力疾走50mして「ニヤー」と鳴く…」

「やらねえ!！」

まだやるか！と明日菜が言うと、これ以上やると本当に機嫌が悪くなる。察したのか、木乃香はちよつと無理やりではあるが会話の内容を逸らすことにした。

「にしてもアスナ足速いよねー私コレなのに」

「悪かったわね体力バカで」

すねたようにいう明日菜。どうやら木乃香が自分の感情の機微を感じ取ってくれたことに気づいたようで先ほどまで降下気味だった機嫌を少し直したらしい。

一瞬後、ふわりと空気が変わったのを明日菜は感じた。

ん、と右隣を見ると、そこにはまだ初等科も卒業していないようなあどけない少年がいた。

少年は明日菜の顔を見るなり、無遠慮に言った。

「あの … あなた失恋の相が出てますよ」

その言葉を聞いた明日菜は血の気が引く思いをした。
恋する乙女にその言葉は禁句だろう。

第二話（後書き）

あははーマクダウェル先生はどこに行ったのかなあー？

次回は先生にきっちり登場していただきたいと思えます。

というかこの小説は誰が主人公になるんだろう？

誤字脱字の指摘大歓迎です！

第三話

「失恋の相が出てますよ」

そう少年、ネギ・スプリングフィールドに言われた明日菜は言葉を上手くつむぐことができなくなった。

それほどまでにネギのセリフは明日菜の心を抉ったらしい。

しかし、そのままショックを受けるだけの明日菜ではない。

その衝撃を受けた感情の発露は怒りとなってネギに向けられた。

「何だところんガキヤー!!」

「いえ、何か占いの話が出ていたようだったので」

「…テキトー言つと承知しないわよ」

血の涙がでそうなくらい、だくだくと涙を流す明日菜にネギはさらに追い討ちをかけた。

「いえ、かなりドギツイ失恋の相が…」

その言葉が引き金だった。明日菜は相手が子どもでもあるとはいえ、自分にとって最悪極まりない言葉を発した彼に容赦はしようとは思わなかった。

ネギの頭を鷲掴み

ゴツ！ 「べらっ！？」

しよつと明日菜が手を伸ばしたそのときに、その頭に鉄拳が落とされた。

「つつ〜な、何するんですかマクダウエルさん！」

「お前、死相が出てるぞ」

「え？」

しばらくの間、明日菜とネギのやりとりを見ていたのだが、彼はネギに鉄拳をおみまいした後、そう言い放った。

いきなり言われたその言葉にそこにいたネギ、明日菜、木乃香は一瞬意味がわからず動きを止めた。

しかしその言葉が脳に届いたネギがいち早く復活して、彼に食って掛かる。

「そ、そんなわけありません！いい加減なこと言わないでください
！！！」

「いや、かなりドギツイ死相が出てる」

「
っ」

ネギは気づいていないようだが、これは先ほど明日菜との会話の内容に酷似していた。

自分が言ったはずのその言葉を人から言われるところも違うのだということなのだが、ネギは気付かずに、ただいきなりそんなことを言うマクダウエルに腹を立てているだけだった。

苛立ちの混じった子ども特有の甲高いでわめくネギに周りの生徒たちも、なんだなんだと様子を見ながら走っていく。野次馬にならないのはそんなことよりも遅刻することのほうが生徒たちにとって比重が重いからだろう。

周りの視線に気付くことも無くわめいているネギにさらに彼は追い討ちをかける。

「明日にでもお前は死ぬな」

そう断言した彼にとうとうネギは涙を浮かべ、叫んだ。

「な、なんでそんな失礼なこというんですかっ！」

ネギがそう言うと、彼は感情の無い声で問いかけた。

「ふうん、ならお前はさっきこの生徒、神楽坂になんて言ったんだ？」

「ふえ？」

「お前はさっき言ったな神楽坂に「失恋の相が出ている」って、女性にとつて「失恋」という言葉は禁句だ。「死相がでている」と同じくらい重い言葉だ。それを、なんだお前は。いきなりそんな言葉を言われたら相手がどう思うかぐらいわからなかったのか？お前は

「死相が出ている」と言った俺に「失礼だ」と言った。それはお前が言われて嫌なことだったからだろう?」

ネギはそう言われてようやく自分が先ほどかけた言葉が相手を傷つけていたことに気が付いた。

浮かべていた涙は引っ込み、どれほどひどいことを言ったのかを自覚してネギは顔を青くする。

言いたいことは言ったといわんばかりの彼は、いまだ目の前のやり取りを呆然と見ていた明日菜と木乃香を校舎のほうへ促し、顔を青くして立ち尽くすネギを引っ張って明日菜たちと同じく校舎へと向かっていった。

おしらせ

久しぶりの更新がお知らせで申し訳ないです。

先月から仕事が忙しく、こちらで小説を更新をする余裕がございませんでした。

それに引き続き、年末の忙しい時期がやってきました。また年始でも忙しくなるためおそらくこちらでの更新はさらにままならなくなるかと思えます。

そのため来年2月まで更新を完全ストップいたします。

まあ、あつてないような更新速度でしたが…。

更新を楽しみにしていただいていた方には申し訳ないですが、ご了承ください。

しばらくは感想、レビューの受付もストップしようと思えます。

いつもこんな俺得のむちゃくちゃな物語を読んでいただいております！

寒い時期となりましたが、みなさん体調を崩されませんようお気を付けください。

それではまた会う日まで、ごきげんよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9283t/>

ずっと一緒にいたかった。

2011年12月3日14時54分発行